仙石山仏教学論集
第 10 号（平成 30 年）

Sengokuyama Journal
of Buddhist Studies
Vol. X, 2018

# 珍海の「一念信」について
## ――『大乗正観略私記』を中心として――

王　奇

# 珍海の「一念信」について
## ──『大乗正観略私記』を中心として──

王　奇

## はじめに

珍海（1091/1092-1152）は平安末期の南都浄土教を代表する学僧としてよく知られる。近年の研究によって[1]、彼に関する著作及び思想と生涯は徐々に明らかになってきているが、従来の研究は浄土教学に関するものが多い。

また、珍海は三論宗の学僧としても多くの著作を残しており、そこでは三論宗の大成者吉蔵（549-623）の著作が参照され、多数の引用が見られる。本論文では、『大乗正観略私記』（以下は『略私記』と略す）を主な資料として、珍海における三論宗教学の立場から、珍海によって説かれた「一念信」について考察する。

---

1 明山安雄「永観・珍海の浄土教研究序説」（『仏教大学研究紀要』第 46 号、1964, pp. 35-75）

小野玄妙「珍海已講の事跡とその芸術」（『小野玄妙佛教芸術著作集』第 10 巻、開明書院、1977、pp. 926-944）

坂上雅翁「珍海の浄土観」（『印度学仏教学研究』巻 26 第 2 号、1978, pp. 705-706）

「珍海―画僧と学僧―」（『浄土仏教の思想』七、講談社 1993, pp. 179-252）

大谷旭雄「南都における『往生要集』の受容と展開―珍海『安養知足相対抄』を中心に―」（『往生要集研究』永田文昌堂、1987, pp. 209-242）

奥野光賢「三論宗における声聞成仏について―珍海の見たる吉蔵の声聞成仏観―」（『印度学佛教学研究』第 2 号、1990、pp. 686-690）

梯信暁「珍海『決定往生集』の一考察」（『日本浄土教の形成と展開』法蔵館、2004, pp. 121-141）など。

## 1.『大乗正観略私記』の概観と構成

本論文で扱うテキストは『大正蔵』[2]に収録された『略私記』である。その書誌情報は以下の通り。原写本は快盛により天文十二年（1543）十月十三日に南都東大寺の観音院において書写され、現在高野山正智院に所蔵されている。対校本としてのもう一つの写本は元文三年（1738）に書写され、現在薬師寺に所蔵されている。高野山正智院経蔵史料集成二『正智院聖教目録』上巻[3]の記録によると、快盛は大永八年（1528）二月、東寺において灌頂を受けており（「大永八年二月二十六日、快勝授快盛東寺十二重灌頂。」）、同書にある文書「両部傳法灌頂印信」により、正智院灌頂道場において、快盛が両部灌頂の印を伝法したとある（「於正智院灌頂道場、授兩部傳法灌頂快盛法印畢。」）[4]（年月日なし）。この記録により、『略私記』を写した快盛は正智院の学僧として、密教の灌頂を受け、かつて密教の僧として活躍したことがあったことがわかる。

また、両写本巻末の識語から見ると、正智院に所蔵された原本には「右、天文十二年十月十三日、於南都東大寺、以觀音院御本馳悪筆。是併爲三論結縁也。求法沙門快盛。」（右、天文十二年十月十三日に南都東大寺に於いて、觀音院の御本を以て悪筆を馳す。是れ併に三論の結縁と爲すなり。求法沙門快盛。）と書かれており、それに対して、薬師寺写本の巻末には「承元四年三月八日亥時書訖。以禪那院御自筆之草本所寫之地、追得再治本者、必交點之。予、雖入龍樹之門葉、未辨一宗之旨歸。以寫此書之功、爲謝彼咎之基矣。羊僧實親。」（承元四年三月八日亥時書き訖る。禪那院御自筆の草本所写の地を以て、追って再治本を得ば、必ず之に交点せん。予、龍樹の門葉に入ると雖も、未だ一宗の旨歸を辨ぜず。此の書を写すの功を以て、爲に彼の咎の基に謝せん。羊僧実親[5]。）と記されている。使用するテキストの冒頭の注により推測して、薬

2 高楠順次郎・渡辺海旭主編『大正新脩大蔵経』Vol. 70、No. 2298, pp. 195a4-199c3 大正新脩大蔵経刊行会（大正出版株式会社、1992）

3 山本信吉編『正智院聖教目録』上巻、高野山正智院経蔵史料集成二（吉川弘文館、2006、p. 392）

4 同書、p. 411（吉川弘文館、2006）

師寺に所蔵された写本が校訂本であると推測される。

また、テキスト中に原文より一字下げた19行の小文字があるが[6]、欄外注記によると、薬師寺所収の写本の中には書かれていない。内容の検討により、これはほぼ『三論玄疏文義要』[7]（以下は『文義要』と略す）の第一巻から引いた文章であることが確認できた。ただし、この引用は原文の全てではなく、省略した引用である。恐らくこれらの小文字は珍海ではなく、写した快盛、或はそれ以前に誰かが『文義要』を踏まえて珍海の著作に補充したのであろう。しかし、今回の論点は『略私記』にみる珍海における「一念信」についての一考察なので、この19行の小文字の挟注については言及しない。

『略私記』は一巻であるが、内容的に三つの部分に分けられている。

第一は大意門である。この段階の冒頭に「中道正観大意如何」[8]（中道正観の大意は如何）という問いが設けられ、三論宗の所依の論書『中観論』が挙げられ、「正観」という言葉を加えて大意を明らかにする。この「中道」はインドの龍樹（2-3世紀）の『中論』に相当する[9]。「正観」という言葉については、吉蔵の諸著作の中で「正観論云」「正観論曰」という表現で『中論』を示すが、『略私記』の場合には『中論』の論書を指すのでは

5　羊僧実親　羊僧は唖羊僧ともいい、愚かな僧侶のこと。ここでは謙遜語として用いられている。実親は僧名である。

6　珍海『略私記』（『大正蔵』Vol. 70、No. 2298, p. 196a1-a19）

7　珍海『文義要』（『大正蔵』Vol. 70、No. 2299, pp. 199-378）『略私記』と『文義要』の奥書から見れば、それぞれ「長承三年正月十五日沙門珍海記之」と「保延二年七月一日抄竟。自天承之此時待暇隙兩三于之間抄之。近日分巻。三論学沙門珍海記之」とあるが、『大乗正観略私記』の原文中に「若依智光亦立三時。與嘉祥宗亦不相違。此等廣釋如文義要」（若し智光に依らば亦三時を立つ。嘉祥宗と亦相違せず。此れ等の広釈は『文義要』の如し）と「此義廣論如文義要」（此の義の広釈は『文義要』の如し）とあるところからみれば、『文義要』の著作年代はその奥書に記載されてある年代より早くなり、恐らく『大乗正観略私記』より早いと筆者は考えている。

8　珍海『略私記』（『大正蔵』Vol. 70、No. 2298, p. 195a10）

9　斎藤明「中観思想の成立と展開―ナーガールジュナの位置づけを中心として―」『シリーズ大乗仏教』第6巻（pp. 6-7）

なく、無執着の中道の立場を指すと考えられる。なぜなら、珍海は『略私記』の中で「中道正観」を解説する際に「云何一向作無所得觀耶。答、考尋聖人興世、諸所施爲爲顯中道。令因中發觀滅諸煩惱[10]（云何にして一向に無所得の觀を作すや。答う、聖人世に興こるを考尋し、諸所に施しをして爲に中道を顯わさんと爲す。中に因りて觀を發し、諸の煩惱を滅せしむ。）」と。無所得（無執着）の観をもって中道としての正理を顕すと述べているからである。

第二は諸門分別である[11]。これは十門に分けられ、各教門の内容については本論文では詳しく立ち入らないが、十門の各タイトルは以下の通りである。

1. 立教門
2. 師宗承習
3. 宣通大概
4. 立宗本教
5. 理内理外
6. 法門名数
7. 遣蕩究竟
8. 道門宗極
9. 仏道遠近
10. 大乗無礙門

第三は総結宗帰である。最後の宗帰を総結するとして、珍海は『中論』の八不偈を強調して、中道はまるで月のように正観の水を照らすと述べており、無所得の中道の正理を全篇に貫く。

以上が『略私記』の大要である。本稿は第二の 9. 仏道遠近の中で説かれている「一念信」を取り上げる。それについて珍海は「若得無生觀者、初心一念即成佛道」[12]（若し無生觀を得ば、初心の一念に即ち佛道を成ず）と「若無所得一念便成佛」[13]（若し無所得ならば一念にして便ち成佛す）及び『仁

10 珍海『略私記』（『大正蔵』Vol. 70、No. 2298, p. 195b15-b17）
11 同書 pp. 195c15-199b14）
12 同書 p. 198c19-c20
13 同書 p. 198c24

王経』の内容を引用して「一念信此經、超百劫、千劫、十地等功德」[14]（一念に此の經を信じ、百劫、千劫、十地等の功德を超ゆ）などを挙げて「一念」と「一念信」について述べている。

さて、珍海はこの「一念」と「一念信」についてどのように解釈していたのか。また彼にとって、この「一念信」はどのような意義があるのかを検討したい。

## 2.「一念信」の引用

### 『略私記』における「一念信」の引用

上に述べたように、珍海は『略私記』の中で「一念信」について複数の箇所でこれを取り上げ、説明している。その原文を示せば次のようである。なお、原文及び書き下し文中の〈　〉部分は挟注部分を示す。

> 第九、佛道遠近。肇公云、道遠乎哉、觸事而眞。聖遠[15]乎哉、體之即神。云云。眞者眞理、神者覺知。覺眞不遠者、則成佛近矣。重牒八不云、以階級之無階級唯一無生觀。無階級之階級故、有五十二位不同。云云。准此、若得無生觀者、初心一念即成佛道。智論亦云、神通乘者、一聞般若便成佛道。問、説神通乘云、曾於無量劫積集善根故一聞即得道〈取意〉。既無量劫積集善根、云何速耶。答、有所得修經無量劫、若無所得一念便成佛、故云神通乘。若不爾者何異馬乘。問、大師不引之、何汝恣引證耶。答、大師釋前已出畢。又欲更知者、釋仁王經一念信此經、超百劫、千劫、十地等功德。文云、超百千劫有相十地。故知、無得一念超無量劫有相十地、即神通乘也。又疏第三引大品云、菩提易得耳、以一切法無生即得菩提〈文、第二十四卷文也〉。問、壞三大僧祇而一念成佛歟。答、不壞三大而一念成。法花玄第九明三世無礙義云、

[14] 同書 p. 198c27-c28

[15] テキスト対校記に「聖」の下に「遠」の字が脱落しているとあり、『肇論』にも「道遠乎哉。觸事而眞。聖遠乎哉。體之即神」とあるので、ここに「聖遠」に改めた。（『大正蔵』Vol. 45、No. 1858, p. 153a4-a5）

乃至一劫攝一切劫、一切劫攝一劫。以有因縁無礙故、得如此也。若有定性、何猶能爾。〈文〉若望此義、以僧祇爲一念故、成佛速也。若望一念無生者、直是一念即名佛也。而約階級不壞者、亦經五十二位。約不壞時、亦經三祇。長短無礙、即無所畏。此宗亦有超悟菩薩、如法華疏。此義廣論如文義要[16]。

（第九、佛道の遠近。肇公云わく、「道は遠きかな、事に触れて眞なり。聖は遠きかな、之を體すれば卽ち神なり」と云云。眞とは眞理、神とは覺知。眞を覺すること遠からずとは、則ち成佛近きなり。八不を重牒して云わく、「階級これ無階級なるを以て唯一の無生觀なり。無階級これ階級なるが故に、五十二位の不同有り」[17]と云云。此れに准ずるに、若し無生觀を得れば、初心の一念に卽ち佛道を成ず。『智論』に亦た云わく、「神通乘とは、一たび般若を聞かば便ち佛道を成ず」[18]と。問う、神通乘を説いて云わく、曾て無量の劫に於いて善根を積集するが故に一たび聞かば卽ち得道す〈取意〉[19]。既に無量の劫に善根を積集すれば、云何がして速なるや。答う、有所得は修して無量の劫を經る、若し無所得ならば一念にして便ち成佛す、故に神通乘と云う。若し爾らざれば、何ぞ馬乘と異なるや。問う、大師[20]は之を引かず、何ぞ汝は恣に引證するや。答う、大師の釋は前已に出だし畢んぬ。又更に知らんと欲さば、『仁王經』を釋すに「一念に此の經を信じ、百劫、千劫、十地等の功德を超ゆ」[21]と。文に

16 珍海『略私記』（『大正藏』Vol. 70、No. 2298, p. 198c14-199a12）

17 吉藏『中観論疏』巻二の中に修道の階位について以下の様な記述がある。「不生亦不滅下第二重牒八不解釋。前已略出三種方言。但八不既是衆經大意此論宗旨。」（『大正藏』Vol. 42、No. 1824, p. 20a20-a22）「以階級無階級唯一無生觀。無階級階級故有五十二位不同。所以五十二位並作無生觀者。良由二諦本來無生。故因二諦無生發無生觀。」（『大正藏』Vol. 42、p. 24c15-c18）

18 『大智度論』に「世尊若人往來六道生死中。或時得聞般若波羅蜜。受持讀誦正憶念。必知是人不久得阿耨多羅三藐三菩提。」とある。（『大正藏』Vol. 25、No. 1509, p. 526a28-b2）

19『大智度論』巻六十八に以下の様な記述がある。「復次是菩薩於無量劫爲佛道故種善根。」（『大正藏』Vol. 25、p. 631a28-a29）

20 大師は吉藏のことを指す。

21 吉藏『仁王般若經疏』に「是上三佛説般若波羅蜜經八百萬億偈於一偈中復分爲千分於一分中説一分句義不可窮盡況復於此經中起一念信是諸衆生超百劫千劫十地等

云わく、百千の劫と有相の十地を超ゆと。故に知んぬ、無得の一念は無量の劫と有相の十地を超ゆることを卽ち神通乘なり。又『疏』の第三に『大品』を引いて云わく「菩提は得易すきのみ、一切の法は無生なるを以て卽ち菩提を得」[22]と〈文、第二十四巻の文なり〉。問う、三大僧祇を壞して一念にして成佛するや。答う、三大を壞さず而して一念に成ず。『法花玄』第九に三世無礙の義を明かして云わく、「乃至一劫は一切劫を攝し、一切劫は一劫を攝す。因緣無礙有るを以ての故に、此の如きを得るなり。若し定性有れば、何ぞ猶お能く爾るや」[23]と〈文〉若し此の義に望まば、僧祇を以て一念と爲すが故に、成佛速やかなり。若し一念無生に望まば、直ちに是れ一念を卽ち佛と名づくるなり。而して階級を壞せざるに約さば、亦た五十二位を經る。壞さざるに約す時、亦た三祇を經る。長短無礙、卽ち無所畏なり。此の宗亦超悟の菩薩有り、『法華疏』の如し。此の義を廣く論ずるは『文義要』の如し。）

『略私記』中の第九「仏道遠近」の原文は以上に挙げたようである。吉蔵の著作などをたびたび参照し引用していることがわかる。珍海は吉蔵の『仁王般若経疏』の句を引いて「釋仁王經一念信此經、超百劫、千劫、十地等功德。」と述べているが、この「一念信」の「一念」は「現在の利那

---

功德何況受持讀誦解説者功德即十方諸佛等無有異當知是人即是如來得佛不久」とある。（『大正蔵』Vol. 33、No. 1707, p343b5-b9）また、羅什訳『仏説仁王般若波羅蜜経』に「我今説般若波羅蜜。無二無別。汝等大衆。應當受持讀誦解説是經。功德有無量不可説。不可説諸佛。一一佛教化無量不可説衆生。一一衆生皆得成佛。是佛復教化無量不可説衆生。皆得成佛。是上三佛説般若波羅蜜經八萬億偈。於一偈中復分爲千分。於一分中説一分句義不可窮盡。況復於此經中起一念信。是諸衆生超百劫千劫十地等功德。何況受持讀誦解説者功德。即十方諸佛等無有異。當知是人即是如來得佛不久。」とある。（『大正蔵』Vol. 8、No. 0245, p. 829c3-c13）

22 吉蔵『中観論疏』第三に「如大品云菩提易得耳。以一切法無生即得菩提也。」とある。（『大正蔵』Vol. 42、No. 1824, p. 38c28-c29）『略私記』にある引用文後の割り注に「文第二十四巻文也」とあるが、『摩訶般若波羅蜜經』第二十四巻の検討結果、引用文に合う記述は見当たらない。

23 吉蔵『法華玄論』巻九に三世に自在無礙の義について「乃至一劫攝一切劫。一切劫攝一劫。以有因緣無礙故得如此也。若有定性何猶能爾。」と述べている。（『大正蔵』Vol. 34、No. 1720, p. 441a16-a18）

の心、極めて短い時間に起こる心の作用。或いは現在の一瞬の心、一度の思い」という意味である[24]。ここでは、極めて短い時間に『仁王経』を心より信じれば、百劫、千劫、十地の功徳を超えて、等覚、妙覚に辿り着けるとし、成仏に到るのが速い法門であると考えられる。

またさらに、原文中に「若無所得一念便成佛、故云神通乘」「超百千劫有相十地。故知、無得一念超無量劫有相十地、即神通乘也」と、同じように「一念」をもって成仏することを説いている。しかし、ここで注意すべきなのは、いずれも「無所得（無得）」と「神通乗」に言及されている点である。先述したように対象を分別・執着しないのは中道の正理であると考えられるが、これは三論宗の肝心としても重視され、『略私記』の全篇を貫いている。一方、「神通乗」とは「三密の教法を更に速力の速い乗り物として神通乗という。神速はまた即身成仏にも通じる」[25]という意味であるが、珍海が「故云神通乘」「即神通乘也」と説いているのは、無所得の一念によって成仏することを神通乗と呼称しているのでありこの分別・執着のない一瞬の心により成仏することを神通乗と理解していると考えられる。

更に探究すれば、この「神通乗」については珍海の別の著作『文義要』の中に以下のように述べられている。

> 得入不退菩薩、名神通乘。此菩薩、以先世福力、今速入不退。入不退時、即名爲佛。[26]
>
> （不退菩薩に入ることを得、神通乗と名づく。此の菩薩、先世の福力を以て、今速やかに不退に入る。不退に入る時、即ち名づけて佛と爲す。）
>
> 神通乘、仁王般若經、金剛頂皆名爲伏等。據此文也。今此經、有速疾力者、正對二乘迂迴稽留、一念決定、方名疾得。[27]
>
> （神通乗、『仁王般若經』、『金剛頂（経）』皆名づけて伏等と爲す。此の文に

24 中村元『佛教語大辞典』巻上、p. 51（東京書籍刊 1975）
25 佐和隆研『密教辞典』p. 416（法蔵館 1975）
26 珍海『文義要』（『大正蔵』Vol. 70、No. 2299, p. 323b22-b24）
27 同書 p. 372c6-c8

據るなり。今此の經、速疾力有るとは、正しく二乘の迂迴稽留に對す、一念に決定するを、方に疾得と名づく。）

珍海は神通乗により速やかに成仏することを述べている。しかしながら、吉蔵は「一念信是諸衆生超百劫千劫十地等功徳」[28]と説くが、「神通乗」により成仏するとは説いていない。恐らく、このように説いたのは珍海の特色であろう。換言すれば、珍海にとって、一念信は、執着する心のない中道の正理をもっての一念により成仏する速やかな法門であり、この速やかに成仏する法門は即身成仏、つまり神通乗なのである。

## 珍海における「神通乗」と「一念信」の関連

以上によって、珍海が説いている「一念信」と「神通乗」の間の相互関係が分かった。では、このような考えはどのようにして形成されたのだろうか。まず先に挙げた『略私記』の第九の原文から見てみよう。

> 有所得修經無量劫、若無所得一念便成佛、故云神通乘。若不爾者何異馬乘。[29]

このように、執着する心のない中道の正理をもっての一念を通じて成仏することができる。若しそうではないならば、馬車と同じではないか、と珍海は考える。

なお、空海（774-835）の『大日経開題』の中に、『略私記』に説かれている「神通乗」の句に対応する文章がある。

> 大品經云、或有菩薩初發心時、即上菩薩位、得不退轉。或有初發心時、即得無上菩提、便轉法輪。龍樹菩薩曰、乘羊去者、久久乃到、乘馬則差速。若乘神通人、於發意頃便至所詣。[30]

---

28 注 21 を参照

29 珍海『略私記』（『大正蔵』Vol. 70、No. 2298, p. 198c23-c25）

30 空海『大日経開題』（『大正蔵』Vol. 58、No. 2211, p. 9a9-a13）

（『大品経』に云わく、「或いは菩薩初に発心する時、即ち菩薩位に上り、不退転を得ること有り。或いは初に発心する時、即ち無上菩提を得ること有り、便ち法輪を転ず。」と。龍樹菩薩曰く、「羊に乗りて去る者、久々にして乃ち到り、馬に乗るは則ち差速し。若し神通に乗る人は、意を発する頃に於いて便ち詣する所に至る。」と。）

つまり、成仏するための道を行くのに、羊より馬のほうが早い、馬より神通のほうが早いという比喩を通して、神通乗の速さを説いている。珍海はこの「神通乗」を成仏のための手段として理解し、心に分別・執着しない中道の正理をもっての一念で成仏することができるなら、神通の力によっても同じように成仏できると考えるのであろう。このような観点は密教思想からの影響があると推測され、この「神通乗」についての解釈は密教的な側面があると考えられる。これは珍海が三論宗の学僧として密教思想をも受容していたと言えるであろう。

## 3.「一念信」の作用

前述したように、珍海にとっては、無所得の一念により成仏する速やかな法門が神通乗として考えられていると思われる。

さて、文中に現れた「一念信」は珍海にとってどのような働きがあるかを再吟味したい。

まず、『文義要』の内容から見てみよう。

凡言速疾、乃有多意。一者、方便示現速疾成佛〈如疏云速方便龍女刹那成佛。四句如文〉。二者、正觀一念成佛。[31]

[31] 珍海『文義要』（『大正蔵』Vol. 70、No. 2299, p. 372b28-c1）

また、珍海は『文義要』第七巻の中で「一念信」をめぐって以下のような文を説き、『仏説仁王般若波羅蜜経』及び『仁王般若経疏』の文を引いて繰り返して「一念信」について述べている。即ち：

「就大乘中、一念信無生爲内、未信爲外。又五根立者名内、未立者名外。又十信未入無所得名外、十信已上無所得心發、方名内也。」（同、p. 310a27-b1）

（凡そ速疾と言うは、乃ち意多くあり。一には、方便もて速疾成仏を示現す。〈『疏』に「速かに方便により龍女は利那成佛す」と云うが如し。四句は文の如し〉。二には、正観もて一念に成佛す。）

このように成仏する道は二つを含んでいると述べている。一つは速疾成仏であり、もう一つは心に執着のない中道の正理をもっての一念を通じて成仏することである。この文章から見れば、珍海にとっては、正観の一念は速疾成仏をもたらすという理解があると考えられる。ここにいう「一念」は極めて短い時間に起こる心の作用、或いは一たび発心することを指すと思われる。

一方「信」については、『略私記』の巻末の第三「総結宗帰」から見ればよいだろう。

今略擧要者、在文八不偈、在法一圓中、在説強名、在觀卽事、在空宛然。宛然者如本也、無礙也、如説有卽爲空等也。（中略）然則空有宛然、性空不捨幻有。中假常通、言説即寂滅也。一相平等、萬有如本。如此信、即初心佛。如是悟者、即初地佛。如此達者、即是等覺。如是窮者、即妙覺也。[32]

（今略して要を擧ぐらば、文に在りては八不の偈、法に在りては一圓中、説に在りては強いて名づく、観に在りては卽事、空に在りては宛然たり。宛然とは本の如くなり、無礙なり、有を説いて卽ち空と爲すが如き等なり。（中略）然れば則ち空有宛然たり、性空、幻有を捨てず。中・假常に通じ、言説即ち寂滅なり。一相平等にして、萬有は本の如し。此の如く信ぜば、即ち初心に仏なり。此の如く悟らば、即ち初地に仏なり。此の如く達せば、即ち是れ等覚なり。此の如く窮まるは、即ち妙覚なり。）

---

「仁王云、於此經中起一念信、超百劫千劫十地等功德。」（同、p. 314a22-a23）

「疏中云、文言一念信超十地者、一念無所得波若信、勝有所得百千劫修行十地功徳也。」（同、p. 314a24-a26）

32 珍海『略私記』（『大正蔵』Vol. 70、No. 2298, p. 199b16-b26）

文中の「本」は非有非無、非真非俗の中道の理を指すと考えられる。八不の義及び執着しない無所得の中道思想を要旨としており、さらにこの要旨をもって一念を通じて成仏することであるという。故に後にこのように信ずれば、初心に、即ち初発心の時に仏になることができる。このように悟るならば初地の段階で仏になることができると言っている[33]。ここにいう「このように信じる」ことは、心の分別・執着しない中道の正理をもっての信を指すであろう。

また、珍海のほかの著作『三論名教抄』の中にも「一念信」と関連する句がある。

故二諦品云、一念信波若、當知是人即是如來。[34]

（故に「二諦品」に云く、「一念より般若を信ぜば、當に是の人即ち是れ如来なりと知るべし。」）

この文章を見ると、先に一念を発して心より『仁王経』を信じる重要性を述べていた珍海は、ここでは一念に般若を信ずれば、仏になれると説いている。このように、珍海にとって、一念信は極めて重要であり、成仏に欠けてはならない要素であった。

---

33 吉蔵は『仁王般若経疏』「仁王護國般若波羅蜜経二諦品第四」の中に「文言一念信超十地者、一念無所得波若信、勝有所得百千劫修行十地功徳也。」と述べている。（『大正蔵』Vol. 33、No. 1707, p. 343b15-b17）珍海の三論宗思想は吉蔵の影響が極めて多いため、彼が説いている「一念信」の「信」は般若（智慧）をもっての無所得の信であろう。彼にとっては、心の分別・執着しない中道の正理をもっての一念を通じて成仏できるけれども、無所得のは修行の前提として重視すべきであり、無所得の信があるこそ仏の境界に入れると考えられるのであろう。

34 珍海『三論名教抄』（『大正蔵』Vol. 70、No. 2306, p. 828c12-c13）また、珍海は同抄の第五巻に、吉蔵の『法華義疏』「提婆達多品第十二」の文を引用して、『仁王経』を信じるだけではなく、『法華経』にも一念に信ずれば、八難、三途の難を離れ、地獄に堕ちないと述べている。即ち：「今明一念信法華經、不疑此品、具離八難、不墮地獄、離三途難。」である。（同、p. 731a28-b2）

## おわりに

本論文は珍海の『略私記』を中心として、その中の「第九佛道遠近」にある「一念信」について検討した。珍海は『仁王経』の文を引いて、もともと三論宗にある教義を受けた上で、密教思想を取り入れ、「一念信」によって、速疾成仏の法門をも説いていることが分かった。珍海は無所得の一念を神通乗と結合させており、神通力により速やかに成仏すると述べている。神通乗により成仏することは吉蔵は説かない。しかし珍海にとっては、一念信は、真理を悟り、成仏するための速疾法門である。『略私記』は珍海の三論宗関係の著作であるが、密教的な思想をも反映し、この点で吉蔵の成仏観と微妙ながらも看過することのできない相違があると考えられる。

# Summary

# On Zhenhai's 珍海 'One-Thought Faith' 一念信: Focusing on the *Dasheng zheng guan lüe si ji* 大乘正觀略私記

WANG Qi

Zhenhai 珍海 is known as a representative thinker of the Pure Land 浄土 tradition in Southern China. In addition to Pure Land, he also shows familiarity with the teachings of the Faxiang 法相, Huayan 華嚴, and Yinming 因明 schools. Many of his works have survived into modern times, and have become the focus of intense scholarly interest. Thanks to these efforts, his life, works, and doctrine are becoming increasingly clear.

So far research has focused on Zhenhai's Pure Land teachings, but his works also contain many references to the doctrines of the three schools mentioned above. In this paper, I examine the meaning of the 'one-thought faith' 一念信 concept as reflected in Zhenhai's *Dasheng zheng guan lüe si ji* 大乘正觀略私記.

*Postgraduate Student,*
*International College*
*for Postgraduate Buddhist Studies*